様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７７００９９

研究課題名（和文）ウォルター・スコット及びジェイムズ・ホッグの作品における妖精表象の実態と近代

研究課題名（英文）Representations of Fairies and Modernity in the Works of Walter Scott and James Hogg

研究代表者
吉野　由起（YOSHINO, Yuki）

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：９０７０７２９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本課題はロマン派期文芸における妖精表象の実態をスコットおよびホッグの作品群に焦点をあて検証した。両者による土着の口承伝統を巡る論考や、詩や小説での妖精の描出例は数多く多岐に亘り、一見懐古的な様相の背後に隠された先鋭的な近代性、独創性と実験性に溢れ、同時代英国文壇で稀有な存在感を放ったと考えられる。これらの例の検証の結果、両者の妖精譚は同時代現実世界に向けた眼差しの体現であり、啓蒙主義の開花とロマン派期文芸の独特の展開をみたスコットランドにおける両潮流のせめぎ合いの顕現であり、口承伝統と古典叙事詩の借用を折衷した神話創造の試みで、両者の文学性に密接に関連するという仮説の裏付けを得た。

研究成果の概要（英文）：This project explored representations of fairies in the literature of the Romantic period, with a particular focus on the works by Walter Scott and James Hogg. Both created a plethora of writing on fairies including poems, novels and essays on the oral tradition. Despite the apparently nostalgic textual surface, these works are filled with acute modernity, originality and experimentation, which presumably gave them a rare sense of presence in the contemporary literary world. Through the analyses of these examples, this study obtained supports for the following hypotheses: (1)fairy writing by Scott and Hogg embodies their questioning on their contemporary real-world; (2)it manifests the intersection and tension between Romantic and Enlightenment literary currents which saw a unique development in Scotland; (3) it is an attempt of modern myth-making infused by the eclectic borrowings from oral tradition and classic epic; and (4) it is closely interconnected with their literary ingenuity.

研究分野：イギリス文学

キーワード：ロマン派期イギリス文学　ロマン派期ヨーロッパのフォーク・リヴァイヴァル　ウォルター・スコット　ジェイムズ・ホッグ　妖精譚

１．研究開始当初の背景

早くも 14 世紀 *The Canterbury Tales* で「はるか昔にこの国には溢れんばかりに存在していたが、もはや見ることができない」とされ、20 世紀幕開け間もないロンドンで日々上演され人気を博した J. M. Barrie の *Peter Pan* では妖精 Tinker Bell の瀕死の姿が提示されて久しい。現在に至る英国の文学や芸術作品において妖精は依然として描かれ読まれ続け、特異な存在感を放っている。

なぜ妖精が描かれ続けるのか、様々な時代の詩人・作家・芸術家に造形された妖精像にはいかなる時代背景・文化事情・作家個々の願望、問題意識、独創性が織り込まれるのか、という疑問が本研究の前提となる出発点である。妖精とは異世界や他者の表象ではなく、むしろ自己の姿、同時代の文化・社会を描いた自画像・風景画の反転なのではないだろうか。たとえば 20 世紀後半の女性作家 Angela Carter は当時の文壇に多大な衝撃を与えた短編集 *The Bloody Chamber* でいわゆる「伝統的」な妖精譚及び妖精像を独創的に、そして破壊的に書き直し、これらが象徴する「近代」の呪縛を解くことを追求した。それでは、Carter が挑戦を続けた「伝統的な妖精譚」とは英国においていかに形成され、どのような特質と意義を持つのか。Carter の作品研究を出発点に、本研究課題の代表者は一貫してこの問題を追及してきた。

18-19 世紀ヨーロッパにおける妖精譚（本論では民話、伝統的もしくは個人によって創作された妖精譚を包括的に指す用語としてこの語を使用する）の研究はグリム兄弟による *Kinder- und Hausmärchen* を主な研究対象として展開してきた。ドイツ・ロマン主義、ナショナリズム言説の展開という観点からのグリム研究は数多く行われており、Jack Zipes が *The Brothers Grimm: from Enchanted Forests to the Modern World* (New York: Palgrave Macmillan, 2002)はじめ一連の著作で繰り返し提示した、グリムが蒐集した妖精譚およびそこに提示された英雄像・妖精像・倫理観・教訓は近代市民社会の発展を推進する役割を負い、国民国家の展開を支える思想的バックボーンとして機能し、文化ナショナリズム言説の素材・媒体としての役割を負ったという仮説は、民話を読み解く上でのアプローチとして一定の地位を獲得している。

他方、英国文学・芸術・文化において「妖精と近代」を巡る問題は Katherine Briggs による先駆的な研究(*The Anatomy of Puck: an Examination of Fairy Beliefs among Shakespeare's Contemporaries and Successors*. 1959. London: Routledge, 2003)以降、近年では Jenifer Shacker (*National Dreams: The Remaking of Fairy Tales in Nineteenth-Century England.* Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2003)、Nicola Bown (*Fairies in Nineteenth-Century Art and Literature*. Cambridge: Cambridge UP, 2001)、Carole Silver (*Strange and Secret Peoples: Fairies and Victorian Consciousness.* Oxford: Oxford UP, 1999) らによって検証され、過去 10 数年では同テーマの研究が従来に比べ活発に行われ、しばしば最新の批評理論の応用も見られるが、先行研究の数は多いとはいえず、特にロマン派妖精譚に関する先行研究の蓄積は乏しい。Bown が *Fairies in Nineteenth-Century Art and Literature* 冒頭の序章で簡潔に行った指摘、すなわち 19 世紀英国文学および絵画で造型された妖精像はスコットランド及びアイルランドのナショナリズム言説と通底するという指摘は極めて重要である。しかしながら Bown による研究は上記の指摘以上にこの問題に踏み込むことはなく、以降スコットランド出身作家を検証の対象とすることはなく、同指摘が喚起する一連の重要な問題—(1)スコットランド出身の詩人・作家・文人たちが英国における「妖精譚の伝統」の形成に果たした役割(2)彼らによる妖精譚、妖精と妖精の国の造型の実態とそこに関与した文化ナショナリズム言説はじめ一連の「近代」的な言説(3)妖精像が前景化する、ヨーロッパ大陸で展開したロマン主義文学と同時代スコットランド文学の連動性(4) (3)を踏まえて浮かび上がるスコットランドロマン主義文学の特性、といった問題はほぼ看過され続けてきた。現在 Sarah Dunnigan が中世から現代に至るスコットランド文学における妖精譚というテーマで研究を行っておりスコットとグリム兄弟の関連を巡る論考も発表しているが、妖精のモチーフが文化ナショナリズム言説の形成と流通に果たした役割の検証や、「妖精と近代」というテーマを個別の作家・作品に即し深く掘り下げた研究は行っていない。

加えて、妖精譚の研究は従来、「民話」として文化人類学的な視点により行われる研究が主流であった。このアプローチで行われる研究では、「口承」で伝えられ語り手や収集者による改変を加えられていない、「純正」な状態の「伝統的な妖精譚」の優位性が偏重され、芸術家個人により創作された「創作妖精譚」は研究対象から排除あるいは糾弾されるという傾向がある。この傾向は 19 世紀末ロンドンで Folklore Society が設立された当初に一端を発すると言える。このため「文学における妖精表象」は文化人類学者から、また文学研究者からも看過される傾向にあり、学界での待遇という点で、研究対象としていわば圧倒的な市民権を得て作品アンソロジーや先行研究が豊富な幽霊譚・幽霊表象とは対極にあったといえる。本研究課題は以上を意識した上で、先行研究に看過される傾向にあった空隙である、より捉え難く複雑性に富むロマン派期スコットランドにおける創作妖精譚のうち、特に独創性に富み 19 世紀英

国における妖精譚の創作と受容のネットワーク上、稀有な存在感と影響力を持ったと考えらえるウォルター・スコットとジェイムズ・ホッグによる作品群を対象とした。

２．研究の目的

ロマン派期ヨーロッパに展開したフォーク・リヴァイバル―定説としては主に民話に象徴される（しかし本研究課題の仮説としては、創作妖精譚が果たした役割も大きい）伝統的国民文化の発見、収集と再創造の運動―の実態を、従来看過される傾向にあった、同運動におけるスコットランドの位置および文学作品として創作された妖精譚の再検証を通して明らかにする。口承バラッドを典型的な対象として展開した「伝統」文化の蒐集、保存、さらに創造・ねつ造の活動がヨーロッパの他地域に先駆け大規模に行われ、グリム兄弟にも多大な影響を与えたスコットランドにおけるフォーク・リヴァイヴァル運動に通底した近代的な感覚を文学作品の分析を通し検証する。具体的な方法論として Walter Scott 及び James Hogg による作品群の分析を行い、彼らにより紡ぎだされた妖精譚に特徴的に見られる重層的な魔術化・再魔術化プロセス、時間・空間表象、地域・土地への執着、喪失感と所在なさ、ノスタルジーというモチーフの特異性を分析し、上記がいかに「近代」を暗喩し表象するかを追究する。

３．研究の方法

国内での予備調査を経て、夏期に集約的に海外での文献調査（エディンバラ大学図書館、スコットランド国立図書館、オックスフォード大学附属ボドリアン図書館、ブリティッシュ・ライブラリー）を行い、一次資料および二次資料の閲覧調査・収集作業を実施した。

収集した資料の分類、読解分析を経てスコットおよびホッグの作品群における「妖精」並びに前近代的なモチーフの直接描写や間接的・比喩的な言及箇所の例を収集し、各箇所における妖精の造型法および用法を検証した。検証の際には Stephanie Barczewski、Katie Trumpener の研究を始めとする、ブリテン諸島で展開したロマン主義文学・美術における英雄・吟遊詩人等、前近代的なモチーフを用いた神話創造の実態を検証した論文を参照し手掛かりとした。

４．研究成果

本研究課題はイギリス・ロマン派期文芸における妖精表象の実態をスコットおよびホッグの作品群に焦点をあてた。両者による土着の口承伝統を巡る論考や、詩や小説での妖精の描出例は当初の予想以上に数多く多岐に亘り、一見懐古的な様相の背後に隠された先鋭的な同時代性、独創性と実験性に溢れ、同時代英国文壇で稀有な存在感を放ったと考えられる。本研究課題では、海外および国内での文献調査による多数の例の収集と検証の結果、両者の妖精譚は同時代現実世界に鋭く向けた眼差しの体現であり、啓蒙主義が開花した一大拠点でありつつロマン派期文芸の独特の展開をみたスコットランドにおける両潮流のせめぎ合いの顕現であり、同時代の現実世界におけるスコットランドの位置を模索する手掛かりとして、口承伝統と古典叙事詩の借用を折衷して行った神話創造の試みであり、さらに両者の文学性、創作上の美学や実験に密接に関連する意図的に選択された表現様式であるという仮説の裏付けを得ることができた。作業の過程で両者による妖精表象には当初の予想以上の拡がり、フォーク・リヴァイヴァルとしての一側面を超えた多彩な様相があり、先行する時代の文学作品や同時代言説との複雑な関連がありがあることが判明したため、読解分析に時間を要し、期間内に論文を完成することができなかったが、論文執筆作業は継続し完成を目指す。

国内外の先行研究にはヴィクトリア朝期妖精譚や通史的な英国幽霊譚研究は多数存在するが、より捉え難く複雑性に富むロマン派期妖精譚を扱う先行研究は、民話研究の分野では存在するものの、文学研究の領域では数少ない。この為、本プロジェクトはこの空隙を埋める作業に一定の貢献を行ったという評価は可能であろう。

本プロジェクトの直接的な成果は学会発表１篇である。関連してロマン派以降の妖精譚の展開の考察も試み、(1)ヴィクトリア朝期妖精譚（ウィリアム・サッカレーとチャールズ・ディケンズによる妖精譚の比較）、(2)20 世紀児童・幻想文学（メアリ・ノートンの作品群）について研究発表を１篇ずつ行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 吉野　由起、「日常と非日常―『借り暮らしの小人たち(*The Borrowers*)』作品群における物語空間と道具の造型(2016 年度日本イギリス児童文学研究大会発表抄録)」『日本イギリス児童文学会報』春季号(2017)：17-18（査読なし）

② 吉野　由起、「文豪によるおとぎ話と魔法のアイテム：William Thackeray, *The Rose and the Ring* と Charles Dickens, *The Magic Fishbone* の比較考察（2015 年日本児童文学

学会・日本イギリス児童文学会 両中部支部9月合同例会発表抄録)」『日本イギリス児童文学会報』春季号(2016): 32-33（査読なし）

③　吉野　由起、「叙事詩の空間：James Hogg, *The Queen's Wake* (1813,1819)における空間造形の特性(2015 年日本カレドニア学会第２回研究会発表抄録)」『日本カレドニア学会 Newsletter』第 54 号(2015): 3（査読なし）

④　吉野　由起、「ロマン派期スコットランドの妖精譚：ウォルター・スコット『最後の吟遊詩人の歌』とジェイムズ・ホッグ『女王の祝祭』」『日本カレドニア学会 Newsletter』52 号（2014 年）:2（査読なし）

〔学会発表〕（計３件）
①　吉野　由起、「日常と非日常―『借り暮らしの小人たち(*The Borrowers*)』作品群における物語空間と道具の造型」2016 年度日本イギリス児童文学研究大会（2016 年 11 月）

②　吉野　由起、「文豪によるおとぎ話と魔法のアイテム：William Thackeray, *The Rose and the Ring* と Charles Dickens, *The Magic Fishbone* の比較考察」2015 年日本児童文学学会・日本イギリス児童文学会 両中部支部9月合同例会（2015 年 9 月）

③　吉野　由起、「叙事詩の空間：James Hogg, *The Queen's Wake* (1813,1819)における空間造形の特性」2015 年日本カレドニア学会第２回研究会（2015 年７月）

〔その他〕
①　吉野　由起、「文豪ディケンズ『大いなる遺産』を読む」（放送大学三重学習センター主催公開講演、於　放送大学三重学習センター、2018 年 2 月）

②　三重大学人文学部オープンキャンパス資料展示「旅を巡る英語圏・ドイツ文学」（共同企画・参加、2017 年 8 月）

③　吉野　由起、「自然と湖水を描く：イギリス・ロマン派詩を読む」（放送大学三重学習センター主催公開講演、於　放送大学三重学習センター、2017 年 2 月）

④　三重大学人文学部オープンキャンパス資料展示「旅を巡る英語圏・ドイツ文学」（共同企画・参加、2016 年 8 月）

⑤　吉野　由起、「旅を巡るイギリス文学」（放送大学三重学習センター主催公開講演、於　放送大学三重学習センター、2015 年 12 月）

⑥　三重大学人文学部オープンキャンパス資料展示「旅を巡る英語圏・ドイツ文学」（共同企画・参加、2015 年 8 月）

⑦　吉野　由起、「イギリス幻想文学の系譜と Mary Poppins」（放送大学三重学習センター主催公開講演、於　放送大学三重学習センター、2015 年 2 月）

⑧　三重大学人文学部オープンキャンパス資料展示「旅を巡る英語圏文学」（共同企画・参加、2014 年 8 月）

６．研究組織
(1)研究代表者
吉野　由起（YOSHINO, Yuki）
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号：９０７０７２９１